



71

麻生区
文化協
会会報

弘法松公園

見晴らしのよい眺め

小田急線の百合ヶ丘駅前から始発バスに乗って、三つ目の停留所「弘法の松」で下車し、そこから10分ほど高台に向かって歩き、石段を上ると「弘法松公園」東側の最上部にたどり着きます。公園は周りを住宅で囲まれた丘陵の尾根部にありながらも、その面積はおおよそ1ヘクタールと手頃な広さで、東西に伸びた尾根全体が閑静な公園になっています。樹木間の坂道を散策したり、ベンチで疲れを癒やしたりするのは格好の場所になっています。なお、この公園には駐車場がありません。

公園の西側の正門付近には、かつて弘法大師が植えたという松の大きな木がありました。高さ32メートル、根回り11メートルの大きな松の木だったそうですが、残念ながら1956(昭和31)年の落雷などによって衰退枯死してしまいました。その後、何回か植え替えられ、現在は2003(平成15)年に植栽されたものが弘法の松として公園のシンボルになっています。

弘法大師、すなわち空海にまつわる伝説は、この「弘法の松」のほかにも日本各地に多数あり、その数は歴史上の空海の足跡をはるかに超えるものです。

空海は804(延暦23)年に入唐し、帰国後真言宗を創建しました。当時、唐ではキリスト教の一派である「景教」が王朝によって庇護されていました。景教と混合した仏教であったといわれます。空海の金剛名号「遍照金剛」も「汝らの光を人々の前で輝かせ」という漢訳聖書からとった言葉とも考えられています。

弘法の松公園は、多摩丘陵でも相当高い地点に立地しています。そのため周辺の街並みのほか、晴天の日には遠くの富士山や、大山などの丹沢山系の山々、さらには南アルプスまで眺めることができます。あまり宣伝などがされていないため、地元の人々以外は訪れることのない穴場の公園と言えるでしょう。



(写真と文／山本 彬夫)

からむし第71号の
ラインナップをご紹介します

P1 麻生区の風物紹介

今号は、弘法松公園からの見晴らしのよい眺めについて、山本彬夫さんが写真と文で紹介しています。

P2 麻生市民館長齊藤誠さんに聞く

4月に麻生市民館の館長に就任された齊藤誠さんに、麻生区のことから文化・芸術・行政のあり方について伺いました。

P3 2022年度総会報告

4月23日に麻生区役所第1会議室にて行われた、麻生区文化協会の総会の記録を写真と文で紹介します。

P4 自然と歴史を未来へつなぐ

―柿生の里、おつ越し山から―
地域の自然の保全に取り組み国交大臣表彰を受けた、「柿生の里クラブ」代表の石井よし子さんが抱負を語ります。

P5 第33回麻生区俳句大会報告

アカデミー部が文化祭行事の一つとして開催した俳句大会の報告です。ギャラリー華沙里 31年の歴史に幕を閉じたから、31年の歴史に幕を、オーナーの井上美佐子さんに語っていただきました。

P6 麻生区文化協会の行事報告

文化サロン部主催の区制40周年記念文化講演会「麻生区の地名を探る」―アルテリッカ新ゆり美術展2022―、「第38回かわさき市民芸術祭」の美術部門及び舞台部門の開催報告と、文化協会の活動を支えるサポーターの方々の声です。

P8 会員の活躍

「第21回墨水会作品展」第8回あさお写遊会」の開催報告と、書の道を究める笠原秋木氏の活動のご紹介です。
文化協会のこれから
夏休み親子教室、デッサン会、俳句講座、文化祭、七草粥の会、文化講演会、アルテリッカ新ゆり美術展の日程のご紹介です。

編集後記

麻生市民館館長 齊藤誠さんに聞く

本年4月に麻生市民館長として、多摩市民館から異動された齊藤誠さんに、これからの取り組み方や麻生区文化協会への提言などをお聞きしました。

これまで主に市民局・市民子ども局・交通局などに勤務、多彩な経歴をお持ちで、仕事の進め方や計画実現の考え方に正確性を感じました。

防止対策による事業の休止や縮小など、旧来とは全く異なる業務を経験されました。

趣味は「自然の中で、ボーッとしていること」。いろいろなシーンを例に、次の仕事へのエネルギー変換法を話されました。

* * *

これからの市民館

市民館は「市民の活動の場の提供」「講座などの学習機会の提供や支援」を主な事業としています。市民の活動の場については、新型コロナウイルス対応によりオンライン活用が普及してきたことから、利用者ニーズに答えられる施設環境の整備が必要と考えています。

市民館の利用者は高齢者が多く、いわゆる現役世代の利用は少ない。新型コロナウイルス終息後においても在宅勤務の継続など、生活環境の変化が予測され、自宅周辺の地域で活動できる時

間が発生すると思われるので、幅広い年齢層を対象とした活動に移行していきたいと考えています。

また、学習機会の提供や支援は、地域にある施設を活用しての学習推進が求められています。将来は市民館職員が中心となった学習機会の提供ではなく、市民相互が身近な場所での学習を行い、市民館は情報提供などの支援が中心となっていくと考えています。

市民館の運営については、「市民館図書館の管理・運営の考え方」が策定されており、パブリックコメントを募集中ですが、市民館毎に立地条件が異なり、これから検討を進めていくことになりました。具体的には民間の活力を活用しサービス向上を図ります。受付や舞台などの運営管理の分業化やホールの在り方など、数年で変えていく必要があると思います。

地域文化の継承に期待

文化協会の構成団体会員は、文化活動への造詣をお持ちであり、さまざまな分野で活躍されている方々が連携して、地域文化の向上を目的に活動されていると認識しています。また、「新しい風と創造」をキャッチフレーズに、いかにして麻生区の文化を次世代につなげていくか、その努力と活動を継続していただきたいと思っています。

以前は文化的な活動は「習い事」として、近所付き合いの中で普通に身近なものでしたが、最近子どもでもあれば学習塾、大人は仕事につながる資格習得目的のものが中心になっているように思います。市民館の運営に携わって感じることは、核家族化がどんどん進み、働き方も多様化しており、地域交流や多世代間の交流がなくなってきたということです。



も会やPTAも然りであると思います。

文化協会の事業の一つである「地域文化の継承」には、若い世代、子どもたちに活動を知ってもらうことが大切だと思います。町内会や子ども会、PTAとのコラボ企画など、親子や地域の方々に広く参加を呼び掛け、次世代につなげていく活動を望みます。

また、多岐にわたる活動には、格調高い内容も多々あると思いますが、伝統ある活動を身近に感じる機会が少なくなっていると思うので、市民館を活動や発表の場として、地域文化の継承に尽力していきたいと思っています。

* * *

齊藤館長には、お忙しいところお話をいただきありがとうございます。麻生市民館での活躍を祈念いたします。

麻生区文化協会は「地域文化の継承」も一つの課題として取り組んでおりますので、ご指導・ご協力をお願いいたします。

(井上俊夫)



齊藤誠館長

麻生区文化協会 2022年度総会報告

4月23日、麻生区役所第1会議室をお借りして今年度の総会が開催されました。

◆開会と会長挨拶

板橋副会長の開会のことはその後、菅原敬子会長から次のような挨拶がありました。

「感染症納まらない中、総会にお越しいただいたご来賓の皆様には御礼を申し上げますとともに、受賞される3名の方々



挨拶をする菅原敬子会長

に、麻生区文化祭奨励賞が、橋本周さん(アカデミー部運営委員)に麻生区文化

振興賞が授与されました。

表彰式

この後、表彰式が行われ、桂米子さん(舞台芸能部運営委員)と長澤順子さん(麻生区いけばな協会会長)

に、麻生区文化祭奨励賞が、橋本周さん(アカデミー部運営委員)に麻生区文化

振興賞が授与されました。

表彰式

この後、表彰式が行われ、桂米子さん(舞台芸能部運営委員)と長澤順子さん(麻生区いけばな協会会長)

に、麻生区文化祭奨励賞が、橋本周さん(アカデミー部運営委員)に麻生区文化

振興賞が授与されました。

表彰式

この後、表彰式が行われ、桂米子さん(舞台芸能部運営委員)と長澤順子さん(麻生区いけばな協会会長)

に、麻生区文化祭奨励賞が、橋本周さん(アカデミー部運営委員)に麻生区文化

振興賞が授与されました。

表彰式

この後、表彰式が行われ、桂米子さん(舞台芸能部運営委員)と長澤順子さん(麻生区いけばな協会会長)

に、麻生区文化祭奨励賞が、橋本周さん(アカデミー部運営委員)に麻生区文化

表彰式

この後、表彰式が行われ、桂米子さん(舞台芸能部運営委員)と長澤順子さん(麻生区いけばな協会会長)

に、麻生区文化祭奨励賞が、橋本周さん(アカデミー部運営委員)に麻生区文化

振興賞が授与されました。

表彰式

この後、表彰式が行われ、桂米子さん(舞台芸能部運営委員)と長澤順子さん(麻生区いけばな協会会長)

に、麻生区文化祭奨励賞が、橋本周さん(アカデミー部運営委員)に麻生区文化

振興賞が授与されました。

表彰式

この後、表彰式が行われ、桂米子さん(舞台芸能部運営委員)と長澤順子さん(麻生区いけばな協会会長)

に、麻生区文化祭奨励賞が、橋本周さん(アカデミー部運営委員)に麻生区文化

振興賞が授与されました。

表彰式

この後、表彰式が行われ、桂米子さん(舞台芸能部運営委員)と長澤順子さん(麻生区いけばな協会会長)

に、麻生区文化祭奨励賞が、橋本周さん(アカデミー部運営委員)に麻生区文化

振興賞が授与されました。

表彰式



(左から) 表彰された橋本周さん、長澤順子さん、桂米子さん

◆来賓挨拶

来賓の三瓶清美麻生区長は、「今年度は区制制定40周年の年ですが、麻生区は芸術文化の街として定着して

おり区長として嬉しく思います。新ゆり美術展では見事な絵画、書、流派を

超えたいけ花などに圧倒されました。コロナ対応3年目の春、改めて芸術文

化の力を認識しました。文化協会のますますの発展を祈ります」との挨拶がありました。

次いで4月に着任された齊藤誠麻生

◆新役員の選出

この後、2022～2023年度役員選考委員会の菅原陽子委員長から

役員選考の結果について現役員を引き続き選考した旨報告があり、拍手で承認されました。

横川副会長から閉会のことばがあり、各部会に分かれて、各部の事業計画、各部の部長、副部長、運営委員、委員の選出について審議され、結果が総務に報告されました。

【新役員】

会長 菅原敬子

副会長 板橋洋一

副会長 山室茂樹

副会長 横川博行

会計 井上俊夫

会計 小田島寛

総務 佐藤勝昭

総務 橋本周

総務 正岡峻

総務 横須賀朝子

【各部会】

文化サロン部 部長 板橋洋一 副部長 富田宏子

舞台芸能部 部長 正岡峻 副部長 伊藤胡桃 副部長 中島邦子

美術工芸部 部長 小田島寛 副部長 石原順子 副部長 木村幾子

アカデミー部 部長 山室茂樹 事務局長 横川博行 副部長 橋本周

副部長 関森田鶴子 副部長 花輪佳子

(佐藤勝昭)

(3)

自然と歴史を未来へつなぐ — 柿生の里、おっ越し山から —

地域学分野会員 石井よし子

この度、緑の愛護国土交通大臣表

彰を「柿生の里クラブ」として受賞しました。夏も冬もたゆまず活動を続けて30名の仲間と共に喜び、励みになりたいと思います。2010（平成22）年に里山ボランティア団体として発足してから12年目です。川崎市緑政部、麻生区役所道路公園センター、麻生市民館、近隣町会、関係各位に感謝申し上げます。

ここは柿生の緑の小舟

左図をご覧ください。柿生駅から徒歩10分ほどの所から多摩丘陵の一部が保全されています。黒川・早野・岡上といった市街化調整区域ではなく市街化区域です。保全には並々ならぬ行政の努力と市民の願い、地権者の方々の理解がありました。1980年代から現在まで、できる



ところから川崎市の緑地公園となっていきました。その一つが柿生の里クラブの活動場所となっている、柿生の里特別緑地保全地区1万9千平方メートル余りです。これらの緑は街中にはほか浮かぶ小舟のように思えてきます。

緑の小舟はメルクマール

東林寺にある大イチョウは麻生村のメルクマール（目印指標）だったのでと想像していますが、緑の小舟もまたメルクマールになります。ちよつと遠出の散策の折にはぜひ標高80メートルほどの緑の連なりを眺望してみてください。例えば鶴川駅周辺からくつきりと緑の小舟の稜線が構えていて、「あそこは柿生」と安心します。春には浄慶寺の辺りが桜色になって季節を教えてください。岡上の古老たちが山の上の学校に通う道すがら（岡上→三輪→上麻生）で、時には喧嘩をしながらも「学校山」として眺め、親しんでいたことでしょうか。

歴史・環境保全地域

東京都には歴史環境保全地域という制度があります。町田市の小野路の里山交流館には図師小野路歴史環境保全地域の資料もあります。豊富な湧水や田んぼと小野路城址などの歴史がいまも、里地里山とその営

みがあります。

足元の柿生もまたとこい歴史環境保全地域と言つていい魅力にあふれています。踏査をし、航空写真を見て、「緑の四辺形」とつぶやいていました。柿生駅を取り囲むようにある緑の四辺形。麻生川、片平川、真福寺川といった水辺もあります。もちろん柿生村の歴史（津久井道、役場跡、宝塔様、学校等々）、暮らしの文化も散りばめられていて現在に続く緑の四辺形です。

そんな緑のコアが緑の小舟です。オツコシという旧家の屋号を冠するおっ越し山、川崎市に最初にできたトンネル跡、中世の山城を結んでいた尾根道、浄慶寺、東林寺、秋葉神社、村の学校の歴史を背負う旧柿生小学校（現柿生中学校）と歴史がいっぱいです。地形としては麻生川流域と真福寺川流域の分水嶺の尾根筋ではありますが、柿生の里特別緑地保全地区はもともとオオヤトという屋号の方の地所でした。雨上がりには麻生川へと山から水が滔々と流れ出て、周辺は小さな谷戸地形が入り組んでいます。

歴史を纏う動植物たち

禅寺丸柿の古木が4本、その昔からそこにあったようにあります。サワガニがいてオニヤンマも飛び、コゲラ、アオゲラ、コジケイも元気でいます。シダはなんと40種以上もあるそうです。



おっ越し山では昔からヤマユリが咲いていました。緑のボランティア活動22年間絶やすことなく保全し、数を増やしています。柿生の里では作業を始めて7年目、10年目で自生のヤマユリが復活しました。自然からの賜物に皆、深い感動を覚えました。キンラン、ギンランをはじめとしたさまざまな山野草も復活しています。貴重な動植物を次世代に伝えていくためにも、ついでい

新しい森づくりを目指す

いのは写真だけ。見掛けたらそーっとしておきましょう。その昔、薪炭林だった頃のコナラが今では大径木となり、ナラ枯れに遭っています。現場では試行錯誤が続きます。定例活動日、環境学習などの日はどうぞお出かけください。皆様のお知恵とご助力をよろしくお願ひします。



開通のころ（上麻生側）
柿生トンネル
（「ふるさとを語る」より）

第33回 麻生区俳句大会報告

2021(令和3)年10月30日に麻生市民館で開催されました。昨年同様、万全なる感染対策を講じ、当日の席題句会や小学5年生の俳句大会は中止しました。

第1部式典では、入賞者表彰、優秀者記念品授与がありました。今回は129名、462句の応募があり、26名の選者による厳選の結果、川崎市長賞をはじめ入賞句9作品、優秀句20作品が決定しました。

〔入賞者紹介〕

- 川崎市長賞 池内英夫
夕焼けを使い切るまでバット振る
- 川崎市議会議長賞 都留嘉男
鶴飼果つ川風になほ火の匂ひ
- 川崎市教育委員会賞 山室樹声
千年の古利すつぱり蝉時雨
- 麻生区長賞 細貝昭吾
谷ほたるの闇引き連れて舞ひ上がる
- 麻生市民館長賞 谷文香
糸張りて蜘蛛は孤独の風の中
- 川崎市総合文化団体連絡会理事長賞 本玉秀夫
炎昼の一点を見る測量師

○川崎市観光協会会長賞 藤森成雄
禅寺丸讀ふる詩碑や柿の秋

○麻生観光協会会長賞 角田珠子
風涼しワクチン注射終えし道

○麻生区文化協会会長賞 野口和子
小流れは鎌砥ぐ水の澄にけり

市長賞、教育委員会賞を受賞されたお二人に入賞句や俳句を始められた動機についてお話を伺いました。

■池内英夫氏：「夕焼けを使い切るまでバットふる」は甲子園を目指してひたむきに練習に打ち込んでいる姿を詠ったものです。俳句はその時の感動とか心に残った事象を捉えて一句にする楽しみがあります。俳句を始めたいきっかけは、銀行を定年退職した後にもヨネッティで笠原古畦先生の主催する講座のチラシを見て入会し、その後30年余り。その間、古畦先生の後を継ぎ代表も務めました。と語ってくださいました。

■山室樹声氏：「千年の古利すつぱり蝉時雨」この句は麻生区隋一の古利である王禅寺の境内で作ったものです。私が俳句を始めるきっかけと

なったのは、1993(平成5)年12月、友人と金時山へ登ったことです。新雪に輝く尾根道と正面にそびえる富士山の雄姿に思わず五・七・五が浮かび「新雪に輝く尾根や富士真白」でした。1996(平成8)年より笠原古畦主宰の「さざなみ」に入会。現在では「さざなみ」の代表を務めています。平明な俳句、それが私の目標です。と、熱く話されました。



第33回麻生区俳句大会の様子

栗林浩先生(現代俳句協会会員、俳人協会会員)を講師にお迎えした第2部記念講演「俳句を楽しむ・難解句と平明句」も盛況であり、第33回俳句大会を無事終了できました。

(アカデミー部 橋本周)

ギャラリー華沙里 31年間の歴史に幕

―井上美佐子さん語る―

1991(平成3)年9月、新百合ヶ丘駅南口から徒歩6、7分のところに「ギャラリー華沙里」(以下、華沙里)はオープンしました。以来31年間、地元

麻生区をはじめ、川崎市内はもとより横浜、東京、遠くは北海道から沖縄までの画家工芸家・写真家など、プロアマ問わず大変多くの方々の作品の発表展示を行い、親しまれてきましたが、2022(令和4)年5月末、31年間の歴史に幕を下ろし閉廊しました。

華沙里はギャラリーとしてオープンする前、1977(昭和52)年に喫茶店としてスタートしました。その7年後にはステージのある喫茶店として生まれ変わり、新聞のニュースにもなりました。そしてまたその7年後にはギャラリーとして再々出発したのです。

オーナーである井上美佐子さんに思い出のいっばい詰まった45年間をお聞きすることができました。

新百合ヶ丘駅が開業した頃は駅周辺は何もなかったのが、会社帰りの人たちが気軽に立ち寄ることができ、休日地域の方々がコーヒーでも飲みながら交流

できればという思いから喫茶店を始めたそうです。開業して2、3年後には地域の方々をはじめ、ジャーナリスト、画家、工芸家、音楽家、映画製作者、地域で文化活動をしている方々、芸能界で活躍している方など、本当に多くの人々の交流の場となり、まさに井上さんが描いていた通りになっていったのです。

そして何よりも思い出深く印象に残っているのは、いろいろなところで活躍しているグループの演奏・展示発表ができるステージのある喫茶店にしてみても、常連さんの企画立案、そして設計製作のもと、あつという間にそれが出来上がったそうです。さらに、その方々の提案もあり、地域の文化活動の紹介を取り上げ、地域交流をより一層深めていくためのタウン誌「華沙里通信」も誕生しました。記事集めや編集などもジャーナリストの方を中心として、常連さんたちが協力してくれたそうです。「ギャラリーとしてスタートしてからの31年間に、数えきれないくらいの個人グループの方々に発表の場として利用していただいたこと、素晴らしい作者と作品に出会えたこと、多くの方々と交流できたことは、私の人生の本当の宝物になりました。感謝してもしきれないくらいです」とおっしゃった井上さんの姿は、とても輝いておりました。

(岩田輝夫)

麻生区文化協会の行事報告

2021年度文化講演会

「麻生区の地名を探る」
日本地名研究所事務局長
菊地 恒雄氏



文化講演会の様子 (円内／講師の菊地恒雄氏)

今年、麻生区は区制40周年を迎えました。コロナ禍で意気消沈している世の中ですが、少しずつミニミニコロナの生活にも慣れ、市民・事業者行政が一体となって40周年をお祝いすることになりました。そんな中で、2021年度の文化講演会もブレ40周年の冠をいただく

き、3月5日に麻生市民館大会議室で開催されました。

タイトルは、「麻生区の地名を探る」として、溝の口の「てくのかわさき」にある日本地名研究所の菊地恒雄事務局長をお招きし、ご講演いただきました。日本地名研究所は、麻生区内にお住まいだった民俗学者・谷川健さんが発起人となって、著名な歴史学者、文学者、民俗学者に呼び掛け、当時の伊藤三郎川崎市長の肝いりで日本で唯一の研究所として設立されたものです。

当日は厳重なコロナ対策をして、広報活動も麻生区内に限定するなど、準備をしましたが、参加者が予想を大幅に上回る140名を超え、大会議室がほぼ満員となり、資料や椅子が足りなくなるなど、ご迷惑をお掛けしましたことをお詫言します。あらためて麻生区民の地名への関心と文化の知識を求めるパワーを認識させられました。麻生区は、柿生や細山など古くからある町と小田急線沿いに新しく開発された町が混在しています。地名は、地形や歴史、またいわれや時世に合わせたものなどから生まれてきますが、新たにいられた方には、自分が住んでいる

地域でも、なかなかその地名がどうやって付けられたのかを知ることは難しいものです。時間の余裕ができたとき、古くから住んでいる方とのよもやま話やあえて調べるなどしなければ知る機会が持てません。もしかすると子どもが社会の時間で教わったものから教えられるなどということもあるかもしれません。また、既に消えてしまった地名や地域を合わせた名前などもあり、残念だと思えることもあります。駅名にはなっていますが、柿生や新百合ヶ丘は地名にないのも不思議です。

講師の菊地さんは、市内の小学校で教師をされ、麻生区の小学校でも校長として活躍されました。麻生区全域にわたって、資料を使った分かりやすいお話は、丁寧な古い文献を読み、古地図を調べ、地元の人からの話を聴くなどという地道な作業から豊富な知識を蓄えてきたからこそのものだと感じました。

参加者からの質問時間を設けましたが、アンケートなどではもっと深く知りたいなどの意見も多く、土地への愛着は地名を知ることから始まるということを教えられました。麻生区は少子高齢化の中でも人口が増えています。また、会社の転勤などで移転される方も多くなっています。ぜひ、地名を通じて地域への親しみを感じていただければと思います。

(文化サロン部 板橋洋)

アルテリツカ 新ゆり美術展

アルテリツカ新ゆり美術展2022は、3月7日から13日の7日間、新百合トウエンティワンホールの多目的ホールで開催されました。

この美術展は、麻生区美術家協会と麻生区文化協会による実行委員会と(公財)川崎市文化財団の合同で開催され、今回は「麻生区区制40周年記念プレ事業」の冠称のもと実施しました。



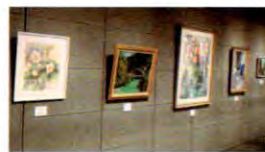
書・いけ花展示

麻生区文化協会は、絵画5点、いけ花合作1点、書5点、写真12点、工芸彫刻11点の作品計34点の展示に加え、文化協会主催の「舞台衣装をつけた民藝

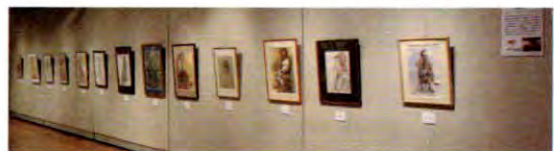
の女優さんを描くデッサン会」参加者の作品13点の展示を行いました。



写真・工芸・彫刻展示



絵画展示



民藝の女優さんを描くデッサン会作品展示

麻生区美術家協会は、洋画16点、日本画4点、工芸1点、彫刻1点の計22点を展示したほか、ギャラリー華沙里を第2会場として小品20点を展示しました。

また、特別企画として、川崎ジニア文化賞受賞作7点をホワイエにて展示しました。

新型コロナウイルス感染防止のために検温手指消毒への協力をいただいたほか、オープニングパーティーは中止しました。

期間中1505名のご来場者がありました。コロナ禍の状況でのご来場に感謝します。

(実行委員長 佐藤勝昭)

第38回 かわさき市民芸術祭

◆美術部門

第38回かわさき市民芸術祭美術部門展が2月8日～13日の6日間、川崎駅北口直結のアートガーデンかわさきで開催されました。

主催は、川崎市総合文化団体連絡会（総文連）です。今年度は、筆者が美術部門の実行委員長を務めました。

期間中、絵画42点、写真12点、手工芸フラワーデザイン32点、書21点、詩歌13点、華道 前期7点、後期7点が展示されました。

麻生区は絵画8点、写真4点、手工芸6点、書4点を出品しました。

昨年はコロナ禍のため、中止となりましたが、今年は感染防止の配慮のもと実施することができました。密を避けるため、展示および撤収の際の時間をジャンル別に分けるなどの配慮をしました。また、お茶席は設けませんでした。



期間中、1019名の来場者があり、熱心にご覧いただきました。美術部門実行委員各位をはじめ、出品者各位のご尽力で無事開催できたことに感謝します。

(実行委員長 佐藤勝昭)

◆舞台部門

3月6日、第38回かわさき市民芸術祭舞台部門が4年ぶりにカルツツかわさきで開催されました。

川崎市総合文化団体連絡会から7文化協会が多彩なプログラムを上演しました。麻生区はモダンダンス「Voices」（井上恵美子モダンバレエスタジオ）とクラシックバレエ ドン・キホーテより「ヴァルセロナの広場」（胡桃バレエスタジオ・Hagaバレエアカデミー競演）で総勢53名が出演、好評を博し芸術祭のトリを盛り上げることができました。会場が遠いため麻生からの来場が多く望めませんでした。出演者・演出指導の担当者たちにとっても喜びに満ちた芸術祭となりました。



モダンダンス「Voices」(井上恵美子モダンバレエスタジオ)

りました。それぞれ特徴のある各文化協会の意見をまとめることが簡単ではない中、今後も大きな課題である予算の不足や感染対策に苦慮しつつ準備が進み、直前の本番リハーサルもマスク付きにするや否や論議、模索の上ようやく当日を迎えました。開催が実現できたことに加え無事終了できましたこと、携わった方々のご尽力に厚く御礼申し上げます。



クラシックバレエ ドン・キホーテより「ヴァルセロナの広場」(胡桃バレエスタジオ・Hagaバレエアカデミー競演)

麻生区文化協会の 活動をサポートして

■コロナ禍の中、さまざまな行事をスムーズに進めるには役員だけでは大変です。私は総会などの行事の際の受付のお手伝いをしました。検温や消毒の確認、資料配布や名簿記入等。久しぶりにお会いできた方々の元気なお顔にホッとしながら、楽しい時間を過ごせました。

(小田島紀美)

■コロナ禍で家にこもりがちを私を、地域での活動に引き入れてくれたのが、文化協会での手伝いです。日頃から地域でできる活動があれば参加したい、と思っていた時でした。今では充実感や、やりがいを感じています。今年の夏は久しぶりの親子教室。子どもたちと出会うことを楽しみにしています。きつとたくさんの元気をもらおうことでしょうか。

(富田 宏子)

かつては文化協会に週1回勤務の事務員を置いていましたが、現在は置いていないため、大きな行事を開催する際は、こちらからお手伝いをお願いします。会員の方にお声掛けをしています。会員の皆様からの積極的なご協力ご参加をお待ちしております。

(総務 橋本周)

会員の活躍

「コロナ禍からの再生」

「第21回墨水会作品展」

水墨画の会である墨水会は、30年あまり麻生市民館の実習室を拠点としてきました。令和2年からコロナ禍により開講の頻度を制限せざるを得なくなり、会員の高齢化に加え、市民館の会議室フロアがワクチン接種会場となったことから会の存続も危ぶまれることとなりましたが、千代ヶ丘児童文化センターが空きスペースを提供してください、活動を継続することができました。その後、市民館実習室の利用が可能となり、会員の創作意欲も回復してきただことから、令和3年11月26日から12月1日、市民館ギャラリーにおいて3年ぶりに第21回作品展を開催しました。来場者300名の関心も高く、2年間の紆余曲折の苦勞も報われた思いで、これからも楽しめる水墨画の会を目指していきたく考えております。



横川 博行 作品

(墨水会幹事 横川 博行)

「第8回あさお写遊会」

今年も年明け1月7日から12日まで麻生市民ギャラリーで開催し、400名の来場者がありました。毎年暮れになると「来年もやるんでしょ。楽しみにしているよ」と言ってくれる知人もいて、緊張と共に元気をいただいています。寒くて来場者が少ないと思われる1月の開催ですが、文化協会主催の七草粥の会に合わせ多くの来場者が期待できます。

今年にはメンバーの一人が長期療養となり、急遽40代の若手にピンチヒッターを依頼。作品を並べてみると経験の差はあるものの、撮影技術や対象をとらえる感性には、学ぶものもありました。熟年世代の我々としては、若手と関わることで刺激をもらいつつ、さらにレベルアップした作品を皆様にご覧いただきたいと思えます。



第8回あさお写遊会

(写遊会代表 小田島寛)

書の道を究める 笠原秋水氏の精力的な活動

コロナを乗り越え2021(令和3)年7月28日～8月1日まで「凌雲書展」が県民ホールギャラリーで開催されました。笠原秋水先生の素晴らしい作品をはじめ、県下の未就学児から高校生までの作品344点、大人の作品200点が広いギャラリーに展覧されました。子どもたちの伸び伸びとした筆字、そして大人の力強い作品の数々に圧倒されました。



「凌雲書展」笠原秋水先生の作品(毎日新聞掲載)

10月14日～17日には、ミューザ川崎4階企画展示室において「秋水会書展」が開催されました。

秋水先生は自分らしさを「ことばと書で表現する」、誰にでも読める、誰にでもわかる作品をモットーにしておられます。ギャラリーを埋め尽くした作品は温かく、それでいてピリツと心を揺さぶられるものばかりでした。特に今回は「コロナを乗り越えよう」を基本に「開放」をテーマにしたとのことでした。川崎市長も来場されたとのことでした。

文化協会のこれから

両展覧会とも、文化協会の専門委員をお願いしております奥様の笠原道江先生との二人三脚。羨ましくも素晴らしいご夫妻の絆を感じた次第です。(会長 菅原敬子)

夏休み親子教室

7月23日(土)～8月17日(水)
麻生市民館、他

民藝の女優さんを描くデッサン会

9月10日(土)麻生市民館大会議室

俳句講座(講師・山田貴代)

9月13日(火)麻生市民館大会議室

麻生区文化祭

10月22日(土)
麻生市民館

「邦舞邦楽」ホール

「俳句大会」大会議室

10月23日(日)

「麻生ファイル」ホール

「吟舞吟詠」大会議室

10月28日(金)～11月2日(水)

「美術工芸展」

市民ギャラリー、ウォールギャラリー

11月6日(日)

「洋舞」ホール

《2023年》

あさお古風七草粥の会

1月7日(土)麻生区役所前広場

文化講演会

3月4日(土)予定

アルテリッカ新ゆり美術展2023

3月6日(月)～12日(日)

新百合トウエンティワンホール

編集後記

「新しい風と創造」をキャッチフレーズとして、変化に挑戦しながら地域文化の継承を模索している。今年には区制40周年を迎え、40周年記念の冠事業が募集されている。これまでにない企画で挑戦することにより、若い世代や子どもたちに私たちの活動を知ってもらうチャンスである。新しい風の中、一歩ずつでも「前へ」進める機会到来だと考える。

広報部から「からむし編集委員会」に名称が変わった。内容も伴うよう、会議では喧々諤々活発な意見交換の末、誌面構成を決めている。より良い誌面づくりの基となる「チームプレー」とはこのことかと感じた。(井上俊夫)

【編集委員】

井上俊夫、岩田輝夫、小田島紀美、小田島寛(写真)、佐藤勝昭、関森田鶴子、橋本周、横須賀朝子

麻生区文化協会公報

からむし 第71号

2022(令和4)年7月20日発行

発行人/麻生区文化協会

編集/麻生区文化協会

からむし編集委員会

川崎市麻生区万福寺1-5-2

麻生文化センター内

☎044-951-1300

印刷/株エリアブレイン